



鳥学会と歩んだ 40 年

13 代会長 樋口広芳 HIGUCHI Hiroyoshi

私が日本鳥学会の活動に参加するようになったのは、大学 4 年生のころではなかったかと思う。今から 40 年以上前のことである。当時、鳥学会の活動は、ほとんどが学会誌「鳥」の発行と年一回の大会の開催に限られていた。また、「鳥」の発行も大会の開催も、現在の状況からすると心細いものだった。

大会のことについて少し触れると、あの当時、大会は東京の渋谷にあった山階鳥類研究所で開かれていた。参加者は 20~30 人ほどではなかったかと思われる。講演は主に鳥の観察記録などにかたよっていたように記憶しているが、時折、浦本昌紀さんや森岡弘之さんなどが、日本の鳥類学の過去、現在、未来について意見を述べ合っていたようなこともあった。こじんまりとした集まりの中で、参加者はみな知り合いになり、いろいろな人と親しく交流することができた。

鳥学会はその後、大きく成長した。成長の引き金になったのは、アマチュア研究者の活躍と機関研究者の増加の二つであると思われる。アマチュア研究者の活躍は、日本雁を保護する会、日本イヌワシ研究会、都市鳥研究会などのメンバーによるところが大きい。これらのグループは、仲間を増やすかわら、独自の調査、研究活動を展開し、その成果を鳥学会の大会の場で発表した。科学的興味を満足させる、あるいは対象となる鳥類を保全することを目標にした、活気に満ちた内容だった。彼らはマスコミにも頻繁に登場し、鳥類研究が社会的にも注目されることに貢献した。1980 年代から 90 年代にかけてが、とくに活発であった時期といえる。

これらのグループの研究者の多くは、現在、アマチュア研究者というより、研究機関には所属していないが実質的にはプロの資質をそなえた研究者となっている。実際、彼らの中には、国や地方公共団体などが行なう鳥類関連調査で重要な役割を果たしている人が少なくない。

大学や博物館、国公立の研究機関などに所属す

る機関研究者の活躍は、90 年代以降になって目立ってきたと思われる。大学の中にも教員が定着、増加し始め、それにともなって、学生も大会などで活発に研究発表するようになった。今日では、大会参加者が 500 人前後になることは珍しくない。参加していても、若い人を中心に見知らぬ人が多数いる。

私は 2000 年代に 2 期 4 年間、会長を務めた。この時期、鳥学会は大きく成長しており、会員数は 1000 人を超え、活動も多岐にわたっていた。事務局は会長のもとにあり、会の会計から庶務にかかわることまで、とても多忙であった。そうした中で、役員選挙の執行で不手際を生じ、会員や役員の方たちにはご迷惑をおかけした。しかし、それをきっかけに、事務局が会長のもとから切り離され、強固なものにさま変わりした。

この会長時代に私が心がけたのは、鳥類学の質の向上と若手研究者の育成だった。学会誌は、「鳥」から「日本鳥学会誌」と“Ornithological Science”の二つに分かれ、どちらにもすぐれた論文が掲載されるようになった。若手研究者は増加し、大会でもすぐれた内容の発表を活発にするようになった。もっとも、これらの発展は、私が心がけたから実現したわけでは必ずしもなく、時代の流れの中で自然に進んでいったものであったように思われる。

日本鳥学会の活動は、現在も着実に進展している。会員の研究は国内だけでなく海外にも広く及んでおり、日本人研究者の書いた論文は、国際誌にふつうに掲載されるようになってきている。私が学生時代をすごしていたころとは、格段の開きがある。若い研究者は数も質も向上している。日本の鳥類学は、これからますます発展していくものと思われる。2012 年は学会設立 100 周年を迎え、2014 年には国際鳥類学会の開催が予定されている。この二つの節目は、日本の鳥類学をさらに大きく発展させることにつながると期待している。

日本鳥学会は、今でも機関研究者とそれ以外の

研究者がともに活躍する場となっている。どちらも強みと弱みをもっているが、ともに世界に向けて活躍の場を広げている。鳥類学は一方で近年、生物多様性の保全、鳥インフルエンザなどの感染症の伝播、あるいは農業被害から航空機や風車との衝突にいたる人間生活との軋轢など、数多くの

重大な問題を抱えるようになっている。今後、機関研究者とそれ以外の研究者との連携、関連する異分野の研究者との協力、基礎、応用両面でかわりの深い東アジア諸国の研究者との連携を深め、研究をはじめとした諸活動をさらに飛躍させていくことが望まれる。